

Geir Hønneland, *Russia and the Arctic: Environment, Identity and Foreign Policy*,
Second Edition

London/New York: I.B. Tauris, 2020. Pp. xxii, 205. Paperback.

ISBN: 978-1-8386-0123-2.

池島 大策

北極は誰のものか、ロシアのものか。ロシアは西洋か東洋のいずれに属するのか。今や北極は「新冷戦」の脅威に晒されているのか。気候変動の下で北極の将来は楽観的なものか否か。これらは、日本の国内外においても世界の注目を集める国際関係上の大きな問題提起である¹。北極におけるロシアの動向が注目を集めるのは、冷戦時を問わず、ある意味当然のことであろう。このことは、ロシアの大陸およびその北極海沿岸海域に眠る石油や天然ガスを始めとするエネルギー資源の埋蔵量、北極5大沿岸諸国（Arctic Five）（カナダ、デンマーク（グリーンランド）、ノルウェー、ロシアおよび米国）のうちロシアが最大の沿岸線保有国であることや、ロシアを除く上記の4か国が北大西洋条約機構（NATO）の加盟国であることなどから、経済上、地政学上、軍事上も頷ける。特に、昨今の気候変動に伴う地球温暖化が及ぼす北極の氷解により、北極海航路（NSR）整備への期待や鉱物資源開発の加速化が最近では北極における地経学（geo-economics）上や環境保護上も注目される点になっている²。

本書『ロシアと北極——環境、アイデンティティーおよび外交政策』（*Russia and the Arctic: Environment, Identity and Foreign Policy*, Second Edition）は、こうした疑問や注目点に関連して、ノルウェー出身の研究者（Geir Hønneland）³がノルウェーとロシアとの関係性を語る幾つかの出来事を素材に書いたもので、一般読

者も十分に理解し得る内容に纏められている。著者は、ロシアと北極との関係をコンパクトながらも国際政治経済の裏面にある歴史的、文化的な背景に焦点を当てながら、幾つかの最近の出来事や卑近な例を通して、読者に親しみやすく伝えてくれる。冷戦後の米ロの角逐を通じて、NATOによる東方拡大とロシアへの牽制圧力の増大の中で、ロシア国民の鬱屈した「敗北感」や疎外感に苛まれるかのような国内感情は、ナショナリズムの高揚とウラジミール・プーチン大統領のような強い統率者への憧憬へと変貌を遂げた。もとより、北極を巡るロシアの行動は、2000年における国連大陸棚限界委員会への延長大陸棚の申請にせよ、2007年にロシアのアルトゥール・チリンガロフ下院副議長らが深海潜水艇で北極点にロシア国旗を打ち立てた示威行動にせよ、機先を制された隣国カナダやデンマークを始めとした西側世界の批判にさらされる宿命にあったといえる。

これらの行為は、北極がロシアそのものであるとの認識と経験に慣れ親しんだロシア国民には、北極を巡るロシアの利害関係に直接関わる当然の活動であるということになる。他方、隣国ノルウェーとの間では、1999年の二国間共同漁業委員会における総漁獲可能量（TAC）の調整（削減）に関する交渉（本書第4章）、2010年のバレンツ海における二国間の海域画定合意や1920年のスヴァールバル条約の解釈適用を巡る資源開発・規制に関する近時の両国間の争い（同第3章）などは、ある種の象徴的な出来事であった。つまり、1世紀以上にも渡る長い間の隣国同士の歴史的、文化的な背景も絡んで、漁業資源への国民の特別な思い、冷戦後のロシアが置かれた劣位への反発心、それに乗じたかのように環境保護に名を借りた隣国ノルウェーの非友好的で居丈高な法令の運用などを巡って、ロシアの地方の住民・漁民と、対外的に平穏友好に振る舞うロシア外務省を中心とした政府の対外的な姿勢との違いに大きく現れる内在的な二律背反的現象といえる。

著者は、こうしたロシア人の国民性や外交姿勢に関して、ロシア人のアイデンティティーを、欧州主義（Europeanism）、西洋主義（Westernism）または西洋気質（Westernness）、文明主義（Civilizationism）といった欧州の中でも高度に文明化が行き渡り、洗練された文化や雰囲気醸し出す伝統や考え方に対置するものとして、広い時空を通して魂（soul）にまで浸透した（ロシア南部の気質（Southernness）とも違う）北方気質（Northernness）、郷土愛（patriotism）そして

郷土を覆う総体としてのロシア気質 (Russianness) といった概念を用い、北極に対して抱くロシア人の思いや感情がロシアの外交政策および北極政策にどのように影響しているかを解き明かす (同第1章)。そこには、ロシア人自身が持つ複雑かつ相容れない対西洋感覚、対欧州感覚、特に冷戦後の (ソ連崩壊後の) 喪失感や (旧ソ連への) 郷愁などのアイデンティティーが見て取れる。しかも、このアイデンティティーが色濃く反映された外交政策が冷戦後の90年代以降、今日までもロシアの対外的な姿勢を貫いており、それを受けとめたプーチン政権はまさに国民のこのアイデンティティーの外交上の体现者ということになる。その象徴として、2013年にクリミア半島がロシアにより併合されたウクライナ危機では、ロシア的なものが西洋的なものと対峙し、ロシア (人) のアイデンティティーが追い求める国益、そしてその国益に基づく外交、すなわち実力行使による目的実現 (= 併合) が世界の耳目を集めたことは我々の記憶にも新しい。

本書は、「ロシア対西洋」、「ロシアと北極」、「土壌と魂」そして「愚か者と悪路」という四つの言説 (narratives) を先ず中心的なものとして抽出する。この四つを通じて、西洋との関係におけるロシアの歴史的・文化的位置づけ、北極に対するロシア人の特別な思い、ロシアの冷厳な気候と広大な土壌、それらに根付いた気質、土着のナイーブな田舎者が朴訥さに自ら翻弄されるロシア人の国民性 (イメージとしてはトルストイの『イワンのばか』に代表される純朴愚直さのことか) や (経済的・インフラ整備上の) 後進性が語られている (同第2章)。そして、著者は、これらの言説がいかにロシアの外交政策を左右し、ロシアの国民感情、住民感情、政府 (外務省) とジャーナリズムによる指摘や批判と時には矛盾し衝突しながらも、ついには落ち着くところに落ち着くのかを、上記で述べた外交上の出来事との関連で抉り出す。

著者は、バレンツ海を巡るノルウェーとの漁業交渉に関連して漁業関係者に対して、またノルウェーとの海域画定合意に関連して地域政府関係者に対して、インタビューや地元報道関係者の著述などを通じて、ロシア人らしさ、北極 (その気候、風土、土壌、文化など諸々の文物を時空を超えて包摂する、いわばロシア人の「北方らしさ」という特性) への固有の感情を分析する (同第5章)。その上で、北極海を共有する隣人であり、敵とまでは言えないが十全な信頼を置けな

いノルウェー人への複雑な思いは、冷戦後のロシア人の抱く非西洋らしさや旧ソビエト時代への郷愁と相まって、土着の地域住民に根付く北方らしさの感情と、中央政府が対外的にそつなく振る舞う対外的理性（友好的な外交交渉と国際法の遵守など）との乖離に繋がるとはいえ、最後は後者に落ち着かざるを得ないという悲劇（tragedy）が常に待ち構えているという。

したがって、冷戦後もロシア人の心には、NATOの東方拡大という現実の前に、その一員である隣国ノルウェーとの付き合い（漁業交渉、海域画定合意など）がロシア自身への耐えられないほどの屈辱的な仕打ちを伴うものとして感じられ、共有する空間や環境は有れども互いに異なる民族性・国民性（ノルウェーのルーツにヴァイキングを見出すのに対して、広大な土地に土着の気質を基礎とするロシア人）がNATOに代表される西洋的なもの、それに馴染めないロシア的なものが絶えず付きまとい、そこに悲劇性と喜劇性（「神話性」さえも帯びるときがある）の双方を著者は見いだす。

ロシアの外交政策にまつわる上記四つの言説から見れば分かるように、ロシア人のアイデンティティーとして、北方らしさと西洋らしさとの間における特有な国民性が北極を巡る対外姿勢、つまり北極政策にこそ自ずと顕現するのが見てとれる。その際に、ロシア人としては常に相手側（the Other）としての西洋らしさに併せて、自己と西洋との相対性を見出すことをしている（othering）という。それがゆえに、ロシアにとっての北極とは、ロシアとその相手側としての西洋が遭遇する日常空間であり、時空を超えた劇場ともいべきものであって、ロシアにとっては西洋に見せるべき自己の姿ということになる（同第6章）。とどのつまり、ロシアにおいては「北極がロシア以上にロシア的である」（「第2版序言」および176頁）と著者は性格づける⁴。

以上の分析から紐解けば、ロシア人がどれほどの愛着を北極に対して持とうとも、西洋と東洋に跨りながらもアイデンティティーをいずれにも見い出せない自国の特異性を冷戦後にも克服しきれないロシア（人）の姿が見えてこよう。本書は、ロシア人のアイデンティティー、その北極への（時空を超えた）格別な思い、その結果としてのロシアの外交政策と北極政策を、ロシアの国情、お国柄、国民性といった視点が外交に与える影響はどれほどかという観点から、ロシアと

北極の関係を掘り下げ、その根拠を代表的な四つの言説に求めている。著者は、独特な、いわばノルウェー的な視点から、ノルウェー人に対してはおろか、NATOに代表される西洋に対してむしろ北極に関するロシアの立場を理解すべしとの箴言を提示しているように聞こえる。

同時に、ロシアの隣国である日本、そして（日清・日露戦争はさておき）第2次世界大戦での敗戦以来複雑な対口感情を有する日本人も、ロシアとの外交関係のさらなる発展を真剣に考える上で、著者の忠告ともいべき本書の分析は貴重な道標と言えよう。上記の事情を踏まえた上で、日本は北極を巡る対口外交方針（特に、シベリア共同経済協力、北極海沖合鉱物資源開発協力、NSR活用等）を定め、外交政策を立案・実施していくことが日本の北極政策を拡充する上での重要な方途となるであろう。こうした姿勢はまた、日口平和条約の締結交渉と対口北方領土交渉の際への応用においても非常に有効な手立てとなり得るものと考えられる。

¹ この点で、本稿評者・池島大策は、2021年（令和3年）2月10日に第204回国会の参議院「国際経済・外交に関する調査会」第1回「極域をめぐる諸課題への取組」において参考人として「極域をめぐる国際的秩序の現状と課題」と題して意見陳述を行った〈https://www.sangiin.go.jp/japanese/kaigijoho/shitsugi/204/s817_0210.html〉（2021年10月3日閲覧）。その会議録として、「第204回国会参議院国際経済・外交に関する調査会会議録第1号」（令和3年2月10日）〈<https://kokkai.ndl.go.jp/minutes/api/v1/detailPDF/img/120414305X00120210210>〉（2021年10月3日閲覧）、特に2-4頁参照。また参議院『国際経済・外交に関する調査報告（中間報告）』（令和3年6月）〈https://www.sangiin.go.jp/japanese/chousakai/houkoku/dai12ki/kokusai2021_01.pdf〉（2021年10月3日閲覧）、4-17頁、特に5-6頁参照。

² 本稿評者・池島大策の議論として、以下の報道番組および記事を参照。「#1932 北極圏めぐり激化ナゼ 米露中の覇権争い行方 米露首脳会談の焦点は」BS日テレ深層NEWS, 2021年6月2日〈<https://www.bs4.jp/shinsou/articles/bukoein87lmpk5ch.html>〉（2021年10月3日閲覧）；「[深層NEWS] 北極圏の覇権争いを議論『ロシアは守りを固めている』」読売新聞オンライン, 2021年6月3日, 〈<https://www.yomiuri.co.jp/world/20210602-OYT1T50336/>〉（2021年10月3日閲覧）。

³ Fridtjof Nansen Institute (FNI) の元所長である著者（Geir Hønneland）は、The Norwegian Helsinki Committeeの事務局長を務める。彼によるノルウェーの北極政策としては、以下を参照。Geir Hønneland and Leif Christian Jensen, '23. Norway's Approach to the Arctic: Policies and Discourse', in *Handbook of the Politics of the Arctic*, edited by Leif Christian Jensen and Geir Hønneland, Edward Elgar, 2017, pp. 462-481.

池島大策：Geir Hønneland, *Russia and the Arctic: Environment, Identity and Foreign Policy*,
Second Edition

- ⁴ 本書の初版（2015年刊）に対する書評に次のものがある。 Nikola Sellheim, 'Book Review', *Polar Record*, Vol. 52, Issue 4, July 2016, pp. 502-503 (<https://www.cambridge.org/core/journals/polar-record/article/russia-and-the-arctic-environment-identity-and-foreign-policy-geir-honneland-2015-london-and-new-york-ib-tauris-xii-191-p-illustrated-hardcover-isbn-9781784532239-5800/A4C1E09890678C8503362D06DE3499C2>) (2021年10月3日閲覧).